
肌に触れて

Naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肌に触れて

【Nコード】

N9916I

【作者名】

Naoki

【あらすじ】

アトピーという疾患を抱える直、成長と共に増える心の傷。

自分の心が醜いのか？

自分の体が醜いのか？

何が悪いのか？

たくさんの人たちと出会いその中で何度も絶望する男を描く。

プロローグ

痒いということの辛さを知っているだろうか。その辛さを常に感じている人々がいる。アトピー性皮膚炎、先天的に過敏な人に生ずる慢性皮膚炎。しばしば喘息、鼻炎、花粉症などを伴い、一種のアレルギーと考えられるが発症機序は不明。痒みという誰にでも分かる感覚による地獄。自分の手で自分の肌を傷つけ、その擦過傷により醜く歪んだ肌を人に差別されることで心を傷つける。そんな体と心を文字通り傷つけていく疾患。これから話す物語はそんな疾患を持つ僕の、傷ついて醜く歪んだ心の、物語。

プロローグ（後書き）

今まで書いた小説の中でも特に長い連載となります。

題材は僕自身も抱えている病氣アトピー性皮膚炎。

題材が題材だけに不快な思いをする方がもしかしたらいらっしやるかもしれませんが僕が自分の病氣と向かい合い自分の経験なども加えて書いたのがこの小説です。どうかご理解のほどを。

みなさんにお付き合いただけるよう、楽しんでいただけるように精一杯がんばるのでよろしくおねがいします。

始まり（前書き）

小学生編となります。

始まり

ある小学校の校庭、校門のそばの一角でランドセルを背負った幼い子供達が輪を作っていた。飛び交っている言葉は喜々としていて、いかにも子供らしい元気に溢れている。しかし、その中心にあるのは純粹であるがゆえの黒い、何か。

「爬虫類」冷たい響きを持つ言葉が発せられる。

その言葉を一身に受けるのは輪の中心で俯き、立っている男の子。彼は長袖、長ズボン、全身を覆い隠す様な格好でご丁寧にもそのパーカーのフードを目深に被っている。

ぼろぼろのランドセル、細い肩にかかっているそれを握りしめた手は僅かだが震えていた。

フードのせいで表情は見えないが彼は今、必死に泣くまいと唇を噛み締めて周りから向けられる悪意に耐えていた。

そのまま、彼は足を校門へと進める。周りの子供達はその周りで野次を飛ばすが、誰も彼に触れようとはしない。

彼らが行う差別とは結局のところ動物の本能に近い。自分達のいる環境でのマイノリティーを、当たり前であると彼らが定義したルールから外れてしまった者を除外する。

野生動物がまれに生まれてくるアルビノ体を排除しようとする行為と通じるものがある。

差別されている男の子はある病気を抱えていた。アトピー性皮膚炎という子供達にとっては得体のしれない疾患、しかもその症状は彼の肌にも明確に出ている。差別の対象としては恰好の対象だった。

一方で差別を受ける側の男の子にはそれがまったく理解ができない。何故、自分が。

自分の持つ疾患にしたって何故、自分が。いつも思っていることだった。

何故自分がこんなに辛い想いをしなければならないのか。

ともすれば爆発してしまいそんな感情をその小さな体に必死に抑え込み、今はただ真直ぐに家に帰ることだけを考える。人を信じられない、自分が他人と同じに見えない、世界が自分を憎んでいるかのように思えた。

彼のこの疾患が発症したのは彼が六歳の時、小学校に上がる少し前だった。

それ以前は、今いる地方とは少し離れた所で両親と三人で生活していた。

当時彼は喘息を患っており、医者の勧めで空気の綺麗な田舎へと父親の両親を頼ってこの田舎に引っ込んできたのだった。

この土地に移ってから、だんだんと日が経つにつれて、彼の喘息も落ち着いていき両親も良かった良かったと喜んでいたところだった。小学校への入学手続きも終わり、彼自身楽しみにしていた小學校生活がこんなことになるなどとその時誰が予想できただろう。

彼の肌の変化は劇的だった。発症当時はなにかに気触れたかなにかだろうと彼の両親は楽観していた。

田舎に引っ込んできて、都会には無いたくさんの動植物に興味を持っていた自分達の息子が不用意に何かに触れたのだと。

ところが肌に現れた疾患は消えるどころか全身にあつという間に広がっていき、そして駆け込んだ病院で、よくあるケースだと医者から聞かされた両親はいったい何が悪かったのかと苦しむことになった。

父親は珍しい事ではないと平坦な顔をしている医者を殴らないように拳を握り締め、耐えた。

母親は誰を恨めばいいのかわからなかった。

息子の異変にすぐに対応しなかったのがいけないのか、息子の喘息にいいからと田舎へ引っ込むことを勧めたあの医者が悪いのか、それともそんな体に息子を産んでしまった自分達が悪いのか。

母親は、涙を流すまいと唇をかんだ。

その日から、その一家に影ができた。ねばついてどろどろとした、

そんな不幸の影だった。

アトピー性皮膚炎、完治させる療法は未だ見つからない。

川村直、それがその両親の息子の名前だった。

始まり（後書き）

小学生編がスタートとなります。

小学生時代の直、彼がこれから誰と出会い育っていくのか。
次話ご期待ください。

爬虫類と銀河鉄道

直にとって、小学校での生活は辛いことばかりだった。

同級生達は彼のことを爬虫類と呼んだ。

体中に出来た擦過傷は彼の肌をたくさんの瘡蓋で覆う、縦横無尽に走る彼の肌の歪な線、彼が体を引くたびに落ちる肌の切れ端、凹凸や引き攣れ、それらは爬虫類の肌を思わせる文様を描く。

肌の色は斑で、自分の手で作ってしまった擦過傷のせいで激しい動きは痛みを生む。

結果、彼は常に体を縮こまらせて、服で体全体を隠すようにし、教室でもフードをかぶったままだった。

誰も近寄ろうとせず、しかし、ある一定距離からは誹謗中傷が飛んでくる。

教師達は皆、厄介事には関わろうとはせず傍観するだけ。エスカレートする周りの子供達の言動を彼らの親達は止めようとしめない。

不幸なことに、彼の住む地域には彼の疾患についてしっかりと知識を持つものは医療関係者以外にはわずかし居らず、そしてそこが田舎であることは彼を守る者の少なさを残酷に示した。

彼の持つ疾患がそれほど珍しいものではないのにも関わらず、だ。

小学校の六年間を彼は図書館と保健室を中心に過ごす。

学校の養護教諭は唯一彼が心を開ける人間だった。

彼女は彼の抱える問題を何とかしたかったが去年大学を出たばかりの新米教師である彼女には何もできなかった。

他の教師達は知らぬ存ぜぬを貫き通し、養護教諭である彼女には教室内で起こる問題に対処することは難しかった。

彼女に出来た事と言えば彼を保健室登校させ、彼のために図書館を開け、彼の気に入った本について貸与手続きをしてやる事ぐらいだった。それですら、教頭に無理を言ってなんとかという状態だった。彼女にとってそれはなりたかった保健室の先生という夢を根本から

崩すものだった。

たくさんの子供達から愛される先生、心や体に怪我をした子供達が最終的に頼る、信頼を寄せられる先生。

それが一般教師達は子供達を面倒を起こす厄介な仕事の一部としか考えておらず、養護教諭である彼女自身は子供達どころかたった一人の子供の苦悩を取り除いてやることすらできない。

それなのに彼は、可哀想に学校のほとんどの人間から差別を受ける彼は、彼女だけは信じられるとでも言うようにそのあどけない笑顔を向けてくる。彼のために何もしてやれない彼女に笑顔を向けて照れたように言うのだ。

「山口せんせ、今日も図書館で本借りていい？」

このところ彼は保健室登校を続けている。登校すると教室には行かず、真直ぐに保健室に来るとランドセルを下ろし、小さな机に座り本を読んだ。彼女に教えてもらいながら勉強もした。給食でさえ保健室で食べる。

彼にとって学校とは保健室と図書館で、先生は保健室の先生だけだ。山口友恵、それが彼にとっての唯一の先生、養護教諭である彼女の名前だ。

友恵は自分の白衣についている名前の記されたネームプレートを時折、いじった。

養護教諭なんてたいそうな肩書の下に山口友恵と自分の名前が書いてある。彼女は思う。

こんなものを胸につけて、さも私は保健室の先生ですなどと子供達に言っていて良いはずがないと。

自分を信頼してくれている子供を救ってやれない保健室の先生など意味がないと。

友恵は、今は楽しそうに本を読んでいる男の子を見る。

彼は二年生、あと四年間で自分は彼を救ってやることがきるのだろうか。

もしかしたら来年にも、転勤になるかもしれない。

そうだったらその後、いったい誰が彼のために図書館を開けてやる？
自分の次にくる養護教諭が他の教師達と同じサラリーマン教師だったらどうする？

彼は本当に居場所をなくしてしまうかもしれない。

彼の抱える問題を改善させることができないのであればせめて彼がやっと手に入れたこの居場所をつぶしたくはない。

彼女の今の願いはそれだけだった。

彼はまだ八歳、彼は読書が好きらしく、すでに子供向けの絵本などは卒業していて今手に取っている本も高学年向けの文庫サイズの一般小説だった。

彼の文学に対する知識はおそらく他の一般の子供達とは比べ物にならないだろうと彼女は思う。

けれど、それを喜ぶ気にはなれなかった。

それだけ、彼が本を読む事ぐらいしかできない環境にいたという事なのだから。

国語教師ではないのでわからないけれど、本というものは絵本から徐々に文学へとステップアップしていくものだと思う。

始めは、絵を見ることが中心に文というものに慣れていき、だんだんと文学というものを理解するにいたるはずだ。

彼が読んでいるのは図書館においてはあるものの本が好きな高学年の人間がとるかからないかという様な純文学。

活字離れが叫ばれる今、ハッキリ言ってこの学校にいったい何人の子がその本を卒業までにとるのか。

実際、貸出カードにはここ数年名前を書き込まれた形跡はなく本があった棚にはうっすらとほこりが積もっていた。

「ねえ、せんせ。カムパネルラって外人さんの名前でよくある名前なの？」直が読んでいた本を閉じて友恵を見た。

「さて、どうだろうね。私はあんまり海外のことはよく知らないから」友恵はできるだけやさしい笑みをつくり答える。

いったいどれだけ辛い環境にいれば八歳の子供が『銀河鉄道の夜』

を理解するまでにいたるのか。

たった八年間、しかも文字を覚えたのはここ数年のはずだ、それだけの間にいったい彼は何冊の本を読んだのか。

それだけの時間を読書以外の子供らしい遊びに興じられなかったのは誰のせいかな。

同情を顔にだしてはいけない、それは友恵が自分に決めた彼に対するルールだった。

「親友ってよくわからないけれど、なんとなくジョバンニのことはわかる気がする」

孤独な少年ジョバンニに共感する彼はどこかザネリを助けて死んだカムパネルラに似ている気がした。

爬虫類と銀河鉄道（後書き）

直にとってのたったひとりの先生、友恵先生の登場です。
これから、彼らはどうしていくのでしょうか。

直は友恵先生以外には心を許せないのでしょうか。
次話をご期待ください

アリスの探し人

「直くん、今日転校生が来たらしいわよ」

山口先生がそう言って僕の前に湯呑を置いた。小学四年生の初冬、僕はもう僕専用となった湯呑に入れられた熱い玄米茶を啜る。

「男？女？」最近の僕は少し、自分でも分かるくらいには生意気な口のきき方をするようになっていた。山口先生は腰に手を当ててよく言うのだ『生意気になっちゃって』と。

「女の子よ。ちょっとは気になるんじゃない？」先生は少しからかうような口調で言った。

「別に」その時の僕は本当に転校生なんぞに興味はなかった。その時は。

噂の転校生はある日突然保健室にやってきた。僕と、山口先生のための空間へ、と。

彼女は不思議の国のアリスだと僕は思った。

僕はさしずめ帽子屋だ。先生と二人で永遠と行われるティーパーティを楽しんでいたところに彼女はやってきたのだ。

黒い髪はさらさらとしていて彼女の腰まで届いていた。

頬は少し赤くてそれがはつきりとした黒い眉とよく合っていた。シンプルなワンピースは彼女を示す薄い空色だ。

僕は読んでいた本を持ったまま固まってしまっていた。

「あら、どうしたの？」僕と向かい合うように小さい机の小さい椅子に座っていた先生が突然迷い込んできたアリスに声をかける。

「ちょっと、探検していたの」

鈴を転がしたような彼女の声が僕の耳をくすぐる。

「探検？それは素敵ね。で、ゴールはここで会ってる？」山口先生がくすくすと笑って言った。

きっとアリスは白ウサギを追ってここまでやってきたに違いない。

「んー、ここじゃないかもしれないけれど。でも、いいや。ちよつと休憩してもいい？」アリスはおかしさを堪える様に口に手を当ててそう言った。

彼女が保健室の扉を閉めて初めて僕は彼女から眼をそらすことができた。そのまま読書に戻る。

けれどいくら読んでも内容が頭に入ってこなかった。僕のすべての感覚はしっかりと小さなアリスに向いていた。

「さてさて、小さなお客様ようこそ、保健室へ。あなたはたしかつい最近転校してきた…」

山口先生が保健室の隅の灯油ストーブの前の椅子に彼女を座らせて言う。

「四年三組、相川静穂です」小さなアリスが大仰に自己紹介して見せた。

「静穂ちゃんっていうのか」ふむふむとでも言いたげな表情で山口先生は腕を組んだ。

そして先生とアリスは二人で笑い合った。彼女たちの風変りな自己紹介はこれで御終い。

先生は普段の山口先生にもどって

「私はこの、保健室の先生で山口友恵っていうの。山口先生でも友恵先生でも好きに呼んで頂戴」

先生は小さなアリスが気に入ったのだろう、小さな湯呑にお茶を注いで彼女に渡した。

基本的に先生は保健室を訪れる生徒達にお茶をいれない。

強請られたり、僕のように丸一日保健室に居る様な生徒以外には。

「友恵先生」彼女は湯呑の中のお茶を見つめて言った。

「私、ある人を探しているの」

「あら、誰かしら？先生の知っている人？」

きつとアリスが探しているのは白ウサギだ。赤いチョッキを着て金の懐中時計を持っている。

「その人はね、私が転校してきてから一度も教室で会ったことがな

いの。名簿には名前があるのに、机だってちゃんと教室にあるの。だけど担任の先生も朝の点呼で名前を呼ばないし、他の子たちも気にしてないの。私はその人を探しているの」

彼女の言葉に僕は息が止まるかと思った。彼女のクラスは四年三組だ、そして僕のクラスも。

そして僕は毎日保健室登校をしている、教室に顔を出したことは一度もない。

僕は帽子屋ではなくて白ウサギだったのか。

「あら、その人のことなら心当たりがあるな」山口先生は意地悪い目をして固まっている僕のほうに眼を向けた。

僕はどうしていいかわからない。

「本当？先生」アリスはうれしそうに先生を見る。

「ええ、その子は教室ではなくていつも保健室にいるの。本が大好きでね難しい本をいっぱい呼んでいるのよ」先生が僕のほうを見たまま言った。

「やっぱり、そうなのね」

ついに白ウサギを見つけたアリスはうれしそうにそう言って僕のほうへやって来た。

正直に言って僕は怖かった。かわいらしいアリスが突然意地の悪いチェシャ猫に化けてしまいそうな気がした。

アリスは固まっている僕の横に立つと僕の持っている本、『不思議の国のアリス』をちらりと見るとその小さな手を差し出した。

僕が顔をあげるとにこりと笑い、そして、「初めまして。白ウサギさん」と言った。

「赤いチョッキも着てないし、金の懐中時計も持っていないけれど。でも、初めまして、アリス」僕はそう言って彼女の手を取った。

小さくて細くて、今にも壊れてしまいそうな、けれどとても温かい手だった。

アリスの探し人（後書き）

直はアリスと出会いました。

物語はいつたいどのようなようにすすみだすのか

不思議の国の様にはちやめちやになつてしまうのか
次話にご期待ください

アリスと白ウサギの恋

それから僕は相川静穂をアリスと呼んだ。彼女は僕の名前を聞くとそちらのほうを気に入って直君と僕のことを呼んだけれど、僕の方はずっとアリスだった。

彼女はほぼ一日置きぐらいに保健室にやってきては僕の横で本を読んだり宿題をしたりしていた。

「養護教諭としては保健室登校児が増えるのは喜ぶべきかどうか……」なんて、山口先生は言っていたけれど、僕は知っている、アリスが訪ねてこない日は少しだけ先生は寂しそうな顔をしていることを。もちろん、僕も寂しかった。始めてできた友達だ、寂しくないわけがない。

アリスは僕と同じくらい本が好きだった。

僕の好きな太宰治とか宮沢賢治とかは彼女には少し難しい様だったけれどそれでも読めない漢字などを僕に聞きながら彼女は僕の勧める本を楽しそうに読んでいた。

僕も誰かのために本を選ぶという楽しみを知った。

昨日、アリスは銀河鉄道の夜を読み終えて、そして少しだけ目を潤ませた。

勇気をもらったジョバンニの様に私も。と、なにやら拳を握ったりもした。自分の感情が素直に表に出る子だった。

僕にはそんな彼女がまぶしかった。

けれど、ひとつだけ彼女には不思議なところがある。

あんなに感情が表に出る子なら、僕の肌を見て何か反応があってもいいはずなのだ。

彼女は何も言わないし、驚きもしなかった。僕の手に平気で触れ、いつも楽しそうに笑うのだ。

「アリスは僕の肌を見ても何も言わないんだね」ある時僕はそう、思い切って聞いた。

怖かったけれどそれでも確かめずにはいられなかったから。

「肌って、アトピーのこと？」

内心ビクビクしていた僕の想いとは裏腹に彼女の答えはひどくあっさりしたもので驚いたことに彼女は病名まで知っているようだった。彼女の話によれば、親戚に同じ疾患を患っている子がいるようで、極端に言ってしまうえば慣れていたのだ。

蓋を開けてみればなんということのない。

その日、彼女は僕のバリケードをまた一つ取り除いた。

彼女がそうやって今まで誰も踏み込んだことのない僕の心に小さな足跡を付けて行きたびに僕の頭は彼女のことではいっぱいになった。った。

これが恋というものなのかもしれない。今まで本の中でしか感じたことのない感情。

僕はアリスが好き、では彼女は？生まれて初めて手に入れた感情は僕に不思議な高揚感と深い不安をもたらしした。

本を読むことで様々な経験を手に入れたと天狗になっていた僕にとってそれは恐怖と幸福が表裏に重なったコインを指ではじく事と似ていた。高く高くはじかれたコインはなかなか落ちてこない。

コインが落ちてきたのはかなり唐突だった。

それは、冬休みまであと何週間かとなったある日、保健室は珍しく何人かの生徒達で賑わっていた。

僕とアリスは隅っこの小さな机で二人並んで大人しく読書していた。山口先生はちょっとした用事で少しの間席をはずしている。灯油ストーブの周りで寒い寒いと手をかざしていた生徒達の中に、僕のことを知っている男の子が一人混ざっていた。

彼は保健室に来てからじっと僕とアリスのことを見ていたがやがて僕に向って突然、叫んだ。

「なんだよ、教室にもこねえで保健室で遊んでるかと思えば爬虫類のくせに女子と仲良く本なんか読んでんのか」

周りにいた彼の友人等が興味を持ちだす。爬虫類ってどういうことだ、あいつと知り合いなのか。

彼らは一気に盛り上がり、僕達を囃し立てる。

「マジだ、こいつ爬虫類みてえじゃん」

「なになに、お前からできてんの？」

「爬虫類と人間の種族を超えた愛ってか？」

「やーい、H」

「スケベ、スケベ、スケベ」

彼らの拙い言葉は、それでも確実に僕の心を抉っていく。

僕はただ唇を噛んで俯くことしかできない。彼らに刃向ったところで体力的にも人数的にも勝ち目はない。

せめてアリスだけでも僕は保健室から出て行こうと勇気を振り絞って立ち上がる。

アリスから離れることで野次の矛先を自分だけに向けようとしたのだ。

ところが静穂は立ち上がった僕の手をつかんだ。

彼女は驚いた僕の眼をまっすぐ見て小さく微笑むと、周りで囃し立てている男の子達を睨みつけて言った。

「私が直君のこと好きじゃいけないの？直君は爬虫類なんかじゃない」

まるで泣いている様な彼女の声はよく響いた。

保健室は水を打ったように静まりかえり、野次を飛ばしていた男の子達もどうしていいか分からずに黙ってしまった。

最初に僕に声をかけた男の子が何故か顔を赤くして黙って保健室を出て行った。

きっと彼はアリスのことが好きだったのだろう。僕に対する野次もそんな嫉妬心からに違いなかった。

けれど僕はそんなことを気にしている余裕も無かった。

アリスの言葉にただ驚いていた、おそらく保健室にいた男の子達の中で一番驚いていたのは僕だろう。

アリスが自分のことを好きだと言った。

それはいったいどういうことなのか、頭の中はごちゃごちゃで保健室にアリスと二人きりになっていることにも気づいていなかった。男の子達は結局逃げるように全員出て行ってしまったのだ。

「え？」僕は自分の声がひどく間抜けに響くのを聞いた。

「私は、直君が好きよ」

どこかさっぱりしたようにアリスはそう言った。

「僕は…、どうしよう、お話がめちゃくちゃだ。白ウサギはアリスに恋をしてもいいのかな？」僕は顔を赤くして、ぽつりと言った。

「だって、白ウサギとアリスじゃ釣り合わないよ。でも、そうだね、僕も静穂が好きだよ」

その時のアリスの笑顔を、相川静穂の笑顔を僕は一生忘れないと思った。

その日は、アリスがワンダーランドから帰って来た日だ。

アリスはお姉さんではなくて爬虫類に似た、大好きな人に出会うことができたから。

相川静穂、僕の初めて好きになった女の子はアリスによく似たちよっと変わった女の子。

アリスと白ウサギの恋（後書き）

幼い二人の恋。

直は幸せの輪郭に触れました。

これから二人の幼い恋はどうなっていくのか。
次話にご期待ください

小さな幸福　くはじめてのく

静穂は毎日、保健室に通うようになった。

山口先生はあきれたように溜息をついていたけど、どこか嬉しそうだった。

「若いつていいわねえ、私も彼氏ほしいわ」

冷やかすようにそう言う先生はいつも少しだけ目を細めて僕達を見るのだ。

「あら、先生だってまだ若いわ。きっと素敵な人が見つかるわよ」
ちよっとおませな静穂はそう言ってウィンクする。

僕はそんな女の人達のやりとりによっぴりときどきしてしまう。
「生意氣ー」先生は大声で笑うといつも静穂の頭をぐりぐりやるのだ。

痛い、痛いと逃げる静穂にしてもちつとも痛そうじゃない。

「直君、彼氏ならこういう時、自分の彼女を助けるんじゃない？」
何度となく繰り返している先生と静穂の、このじゃれあいの後は必ずそう言って静穂は僕の横で腰に手を当てて呆れたふりをするのだ。
僕は軽く彼女の頭をなでて、それで御終い、読書に戻る。

子供扱いしないでと拗ねる静穂はそれでもしばらくすれば僕の横に座って本を読み始める。

飽きることなく繰り返されるそんな馬鹿らしいくらいなんでもないやり取りは僕の心の奥を芯から温かくさせる。

このまま、永遠にこんなやり取りをして、こんな何でもない時間が続いていけばいいのにと思ってしまう。

冬休みはもう明日に迫っていた。

僕は忘れていた。

僕が小学生でいられるのもあとわずかだということに。

冬休みの間、僕と静穂は電話をたくさんした。年賀状もちゃんと

書いたし、初詣も一緒に行った。

小さな田舎なので神社には町の人のほとんどがやって来る。

待ち合わせをする必要もなかったのだけれど僕と静穂は時間を合わせて鳥居の前で落ち合って初詣に出かけたのだ。

静穂は愛らしい赤を基調とした振袖でやって来た。

「お母さんに着付けしてもらったの」

嬉しそうに笑う彼女の髪はきれいに結い上げてあって真っ白なうなじがまぶしかった。

僕らは手をつないで境内の人込みを歩いた。僕はいつものように長袖長ズボンでフードを目深にかぶっていた。

けれどフードはあつという間に静穂に脱がされてしまった。

なんとなくそういうことになる気がした僕は持ってきたベースボールキャップを代わりに被り、母が痒くならないようにと慎重に素材を選んでくれたマフラーに鼻まで顔を埋めた。

気にしなくていいのにと静穂は膨れたけれど気になるものは気になるのだ。

僕らはそれでも手袋だけは外したまま手をつないでいた。彼女の手はとても温かくてなんだか泣きたくなった。

「御神籤、御神籤」

さっきまで膨れていた静穂はあつという間に機嫌を直して御神籤売場まで僕を引っ張っていく。

巫女さんの衣装を着たお姉さんに御神籤をもらうと境内の隅の大きな石に二人で腰かけてお互いの御神籤を見せ合った。僕は末吉、彼女は小吉だった。二人は薄い紙を見つめて一言、微妙だと言った。

「当たるも八卦、当たらずも八卦」僕がそう言うと彼女はくすくす笑って、

「そうね」と嬉しそうに言った。

しばらく境内をぐるぐると回った後、屋台で少しばかり買い食いをして、普段食事制限を受けている僕も今夜は特別だった、その後は家に帰るだけとなる。

夜道を二人で歩く。

子供だけでなんて都会の人からしたら危ないと思うかもしれないけれど、町の人々がたいてい知り合いのここの土地柄なら問題なかった。

僕の場合それが悪い時もあるのだけれど。

静穂の方はきつというんな人から可愛がられているだろうし、大丈夫だ。

手をつないで街灯もまばらにしか灯っていない道を歩く。

静穂は少し静かになっていてどこか顔もうつむきがちになっていた。

「どうしたの？」僕は心配になって彼女の顔を覗き込んだ。

「もっと、直君と遊んでいたかったな」ぽつりとそんなことを言う。

「そうだね。でも、夜も遅いから」僕は自分まで悲しい顔をしてしまいそうになるのを抑えて言った。

僕だってこのままずっと静穂と手をつないでいたい。けれど彼女の家はもうすぐだ。

僕らはできるだけゆっくり歩いたけれど、それでもすぐに彼女の家の前に着いてしまう。

彼女の家の玄関先の小さな電灯に照らされた僕らは泣きそうな表情で向かい合っていた。お互いに手を放そうとしない。また学校が始まれば毎日会えるのに、今ここで手を放してしまったら一生会えなくなってしまうような気がした。

「直君、」静穂は何かを言いかけたけれど結局何も言えずに口を閉じてしまう。

「明日か明後日には年賀状が届くよ。そして三箇日が終わったら二人で遊ぼう。それでその後はすぐ学校だ。大丈夫だよ」

何が大丈夫なのか分からなかったけれどそれでも僕はそう言った。

「うん」少しだけ元気を取り戻してくれた彼女はそう言ってなんとか笑顔を浮かべることに成功した。

「じゃあ、行くね」僕が振り絞るようにそう言うと静穂はそれを拒む様に僕の手をぎゅっと握った。

彼女も分かっている、全部分かっている、それでも離れるのが嫌なのだ。

考えてみれば、今まで僕は学校以外で会うことがなかったからこう言った遊びに出かけた後のお別れには慣れてなかった。

下校する時に一緒に帰るなんてのはよくあったけれどそれは明日には学校で会えると知っていたからそれほど辛くなかった。

世の中の大人たちはどうやって自分の恋人とこんな時を乗り越えているのだろうか。

それとも大人になれば別に気にしなくなるのだろうか。まだ子供の僕にはさっぱりわからなかった。

僕が少しの間考え事に気を取られていると突然静穂が僕のそばに寄った。

「直君、またね」とても小さな声でそう言った静穂は僕の頬にその小さな唇を押しあてるとそのままあわてた様に彼女の家に入ってしまった。

それはずるいと、僕は思った。

僕は彼女の唇の感触がまだ少し残っている自分の頬に手をあてたまましばらく彼女の家を眺めていた。

小さな幸福　くはじめてのく　(後書き)

少しだけ背伸びをした直と静穂。

ふたりの幸せな時間は・・・。

次話をご期待ください。

小さな幸福　　僕たちの

冬休みが終わり、三学期の始業式が行われる。

生徒数もたいしていない僕の通う学校にもそう言ったお決まりの行事はちゃんとある。

保健室に登校している僕と静穂は他の生徒達のようにクラスの列には並ばず、山口先生と生徒達から少し離れた最後尾に立っていた。

どこの校長先生も話が長く、おもしろくもないとよく言われるけれどこの学校の校長先生の話はまあまあおもしろいのではないかと僕は思っている。

このまだまだ寒い時期にも育つ草花があるそうでそんな植物と雪の作り出す世界の話、田舎特有の町での小さな事件などそう言った話をしてくれる。

僕はかなり熱心に聞いていたと思う。むしろ山口先生のほうがあくびをかみ殺していた。

「先生、ちゃんと聞いてなきゃ」僕が小声で注意すると先生は、べーっと小さく舌を出して見せた。

横に立っている静穂がくすくす笑っている。そんな始業式が終わり、僕らはまた保健室に帰ってくる。

「久しぶりな気がするな」

静穂は保健室の中をうろうろと歩き回ってそう言った。

「そう？」僕はそう言っているもの小さな机の上に読みかけの本を置いた。

寒い寒いと山口先生は灯油ストーブに火を入れ、僕と静穂は二人並んで本を開いた。

良かったと思った。

僕らの王国は未だ存在していた。

この小さな保健室の中の小さな温もりが冬休みの間に消えてしまうのではないかと少しだけ不安だったのだ。

しばらくして、灯油ストーブの上に置いたやかんが音を立て始めると、静穂はやおら立ち上がって山口先生の所に行った。

「先生、今日は私がお茶入れてあげる」

「あら、珍しいわね。どうしたの？」棚から急須だのお茶っ葉などを取り出していた先生は驚いたように聞いた。

「なんでもないの」にこにこしながら静穂は先生から急須を受け取った。

静穂が真剣な顔をしてお茶と格闘しているのを眺めながら僕はゆっくりと本のページをめくっていった。

今読んでいるのは原作に近い翻訳がされたピーターパンだ。

文体が古語みたいに難しい表現がしてあったりと難しいけれど慣れてしまえばその独特な表現はとてもおもしろい。

今読んでいる部分はネバーランドの子供たちがフック船長に海賊にならないかと誘われている部分だ。

僕はなぜだかフック船長が好きだった。

子供だけの国、ネバーランド、そんな中でピーター達と壮絶な戦いを繰り広げるフック船長。

僕がネバーランドに思いをはせていると突然、できた！と声が聞こえた。

そちらに目を向けると、静穂が僕の湯呑をお盆に載せてこちらに持ってくる場所だった。

彼女は僕の横まで来ると恭しく僕の前に湯呑を置いた。

「どうぞ、旦那さま」

彼女の言葉に僕は本を落としてしまう。旦那さま？

「あらあら、いつの間にか彼氏からランクアップ？」山口先生が悪戯好きのティンカー・ベルみたいな顔をして言った。

「私とは結婚できないと言っても言うわけ？」何故だか静穂が怒ったように言う。

「いや、だって、さ」僕はどうしようもなくうろたえてしまう。

僕らはまだ小学四年生だ、いくらなんでもそれは話が早すぎるだろ

う。

結婚も、大人の恋愛というものだってまだ知らない僕にそんなことを言われても困る。

それとも僕が変なのだろうか、むしろ僕ぐらいの年齢だったら結婚だなんだと好き勝手に言えるのが普通なのか。

「どうも、直君は考えがおっさんくさいからねえ」山口先生がにやにやとしながら言う。

「どうして？私じゃ嫌？」静穂はもう少し涙目だ。

「嫌じゃないけどさ、どうしたの？突然」僕は彼女の潤んだ瞳によけいにたじたじになってしまう。

さっきまでネバーランドの素敵な冒険に浸っていた僕はやたら生々しい困った事態に陥っていた。

「ひどい、キスまでしたのに。私のことは遊びだったのね」よよと崩れ落ちる静穂。

「あら、そんなところまで二人の仲は進展していたの？直君たら奥手に見えて以外にやるのね」山口先生は楽しそうだ。

「ほっぺだけでしょ？それに先生も、教師なんだからそこはそう言うこと言わないで。僕達まだ小学四年生なんだよ？」

僕はもうパニックだった。そしてしばらく僕が訳のわからないことを喚いていると、崩れ落ちたはずの静穂の肩が震えているのが見えた。

「静穂？」僕は少し嫌な予感がして静穂の名前を呼んだ。

彼女は答えない。彼女のそばへ寄って彼女の顔を覗き込むと僕はかっと顔が熱くなるのがわかった。

彼女はこっそり笑っていたのだった。山口先生も静穂も僕をからかっていたのだ。

僕は恥ずかしいやら悔しいやらで

「なんだよ」とだけつぶやいて椅子に乱暴に腰掛けた。少し冷めかけたお茶を一気に飲み干す。

僕を見ていた二人は耐えきれないとも言おうように大爆笑し、僕は

自分の顔がまだ赤いのを感じていた。

しばらくして、笑いがようやく納まった先生がしみじみと言う。

「それにしてもほっぺにチューか」

「なんなんですか」未だにぶすつとしている僕はそう言って先生を睨んだ。

「もう、怒らないの。冗談じゃないの」山口先生はそう言って取り合わない。

静穂は僕の横でまだくすくすと笑っていた。

山口先生だけじゃなくて静穂もティンクになってしまったようだ。

静穂がの肩に手をおいて僕の顔を覗き込んでくる。

「まだ、怒ってる？」

「怒ってる。ウェンディーだと思っていた静穂が実はティンクだな
んて」僕はぶっきらぼうに言ってそっぽを向いた。

あんまりだ。

機嫌直してよと言いいよる静穂を無視してネバーランドに戻る。

実はと言えば、僕はもうそんなに怒ってはいなかった。

けれど気恥しいのもあって素直に怒っていないとは言えなかったのだ。

「もう」静穂が軽いため息をついたかと思うと突然、静穂が僕の頬にキスをした。

二度目とはいえ、まったく慣れないその感触に僕の時間が止まってしまう。

「これで機嫌直して」静穂は僕の首に手をまわして妙にしなを作っ
て言った。

結局僕は首を縦に振らざる負えなかった。

絶対に、それは反則だと僕は思う。

「あらあら、こりゃ尻にしかれるな」山口先生が呆れたように言う。
尻にしかれるのは嫌だなと僕は思った。

もう、手遅れかもしれないけれど。

私達は無事に五年生になり、保健室は学年が変わってもいつもの通り穏やかでやさしい私達のクラスであり続けた。

友恵先生には転勤の話もあったそうなのだけれど無理を言っこの学校に残ったと噂で聞いた。

それは間違いなく私達のためで、それを思うと友恵先生のために何かしたいと思わずにはいられなかった。

五月五日は友恵先生の誕生日だったので私と直君は先生にこっそり作ったビーズのイヤリングをプレゼントした。

プレゼントを受け取った先生はしばらく驚いていて、その後、あわててトイレへと逃げて行った。

保健室を出る時にはもうすでに先生の目からは大粒の涙がこぼれていたからトイレへ行ったところで先生がうれし泣きしているのはばれていたのだけれど私と直くんは黙っていた。

私は幸せだなと思う。

大好きな直君と大好きな先生と、三人で毎日を大切に、やさしく生きていければそれはとてつもなくかけがえのないものになると信じていた。

今までも、そしてこれからも。

けれどそんな毎日もうすぐ終わる。

五年生が終われば次は最終学年だ。

直君とは同じ中学に行けば会えるかもしれない、けれど先生と三人で過ごすこの保健室の生活は卒業してしまったらもう二度と戻ってこない。

私はどうすればよいのかわからないまままだ毎日毎日を一生懸命に過ごしていた。

それにしても、保健室の先生（子供のための先生）がこどもの日に生まれたというのは、いかななものかしら？

小さな幸福　　く僕たちのく（後書き）

時間はどどん流れて行きます。

そんな中彼らはやっと思つけた幸せに必死にしがみつきます。

子供らしくない考え方と、子供らしい力の無さの狭間でそれでも二人は。

次話をご期待ください。

終わりの始まり

「直君の馬鹿。もう知らない」私の声が保健室に響いた。これで何度目かの直君とのケンカ。

原因はいつも他愛ない事ばかりだ。

今回だって今度の日曜日にデートの約束をしてあったのに、突然、直君が行けないと言い出したのだ。

両親と映画だか何かに出かける予定が入ってしまったそうで、それで私とは会えなくなったのだ。

私にだって分かっていた、小学五年生のまだまだ子供の私達には親の決める予定に逆らう力はあまりない。

他の家では違うのかもしれないけれど少なくとも私や直くんにとってはそういうものだ。

別に無理強いされているわけではない。

直君の両親もきっと私との先約があると言えば直君を無理に連れて行こうとはしないだろう、けれど、直君は知っているのだ。

直君の両親が誰のためと言って直君のためにその日の予定を立てたのを。

私だって忙しい両親が自分のためを思って用意してくれた予定を無碍に断れるわけではない。

それでも、なのだ。それでもこの気持ちはちっとも静まってはくれなかった。

直君は私より両親を選んだんだ、なんてそんなことを思ってしまう。そんな卑屈な自分が嫌で余計にイライラしてしまう。

「ごめん、静穂。でも仕方がないんだよ」そう言って困った顔をする直君に謝りたい。

けれど口から出てくる言葉はいつも違って直君を責める言葉ばかり。

「私との約束なんてどうでもいいんでしょ」

「そんなことあるはずないだろ」少し怒ったように言う直君の言葉

が胸に突き刺さる。

ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。わがまま言って、ごめんなさい。

「静穂、なんで分かってくれないの？」

こんな時、友恵先生が助けてくれないかとか他力本願なことを思うけれどこう言うときはまず先生は口をはさまない。

二人で解決しないと意味がないとかこの前言っていた気がする。

「分かっているわよ。分かっているけれど」結局、私は耐えきれなくなつて泣き出してしまふのだ。

そんなどうしようもない私をいつも直君は優しく抱きしめてくれる。ごめんな。直君のその言葉は優しく、温かくて、そして痛いのだ。

日曜日、私はなにもすることがなくただ家でぼーっと過ごしていた。

朝、お母さんは私に直君とでかけるんじゃないの？と聞いてきたけれど私は不機嫌に行かないとしか言えなかった。私がリビングのソファでごろごろしているのを見てお母さんはしょうがないわねとつぶやいた。

お父さんは朝からゴルフだか何かに出かけている。

「久しぶりに、お母さんとお出かけする？」エプロンで手を拭きながらお母さんがそんなことを言った。

「え？」私が起き上がるとお母さんは笑って

「噂の直君とケンカでもしたんでしょ？今日の静ちゃん機嫌が悪いみたいだし」そう言った。

お母さんは何でもお見通しなのだ。

「仲直りしたもん」私はそう言って拗ねるしかない。

「はいはい、じゃ、お母さんと映画でも行ってリフレッシュしてきましょ。準備してらっしゃい」

私は拗ねた顔をしたまま、それでも自分の部屋に行き、外出の準備をした。

考えてみれば、お母さんと二人きりでどこかへ出かけるのはずいぶんと久しぶりかもしれない。

ちよっぴり元気が出た。

お母さんと手をつないで家を出る。

映画館は少し歩いた先にある駅前通りにある。

春の暖かな風は少しだけ熱を帯びてきていて夏が確実に近づいていることを感じさせた。

小さな映画館に着くとお母さんは古びたカウンターでチケットを買う。

観る映画はこの春出たばかりの新作アクションものだ。

私もお母さんもこういった種類の映画が好きなのだ。

ごちゃごちゃと難しいものよりもこっちの方がよっぽどスッキリと観られる。

お母さんにチケットを貰い係りの人に渡すと慣れた手つきでそれを半分に切り半券を返してくれる。

何となくその時の手つきが私は好きだ。

お母さんと一緒に暗い部屋に入る。

部屋の殆どが階段状の座席になっていてその向こうには大きなスクリーンがでかでかとあった。

わくわくしながら真中あたりの座席にお母さんと並んで座る。

もうすぐ上演だ。

そう言えば、直君も映画に行くとか言っただろうか。

そんなことを思った時、上演のベルが鳴った。

手に汗握る映画が終わり、お母さんと私は映画館から出てきた。外の通りの風が火照った頬に心地よい。

「ちよっと静ちゃん、ここで待っていて。お母さんお手洗い行ってくるわ」お母さんはそう言うと言画館の中に引き返して行った。

映画が終わってすぐに行けばいいのに、なんだってわざわざ外まで出てきてからそんなことを言い出すのだろうか？

私は入口から少し離れてお母さんを待つことにする。

ふと気がつくと、私が立っている傍に空を見つめて煙草を燻らせる男の人がいた。

男の人も私に気がついた様でこちらを見る。

無精ひげを生やした四十くらいのおじさんだ。

と、そこで私はあることに気がつく。

向こうも同じことを考えたようで煙草を口から離すとそのおじさんは言った。

「お譲ちゃんは確か、直の……」

「ガールフレンドの静穂です。お久しぶりです。おじさん」そのおじさんは直くんのお父さんだった。

一度だけ直君の家へ遊びに行ったことがある。その時に直君に紹介されたはずだ。

「静穂ちゃんも映画かい？」おじさんは煙草を携帯灰皿でもみ消すとそれをポケットにしまいながら言った。

笑った顔が直君にそっくりで少しおかしかった。

「はい、お母さんと一緒に」私がそう言うと、そうかとおじさんはつぶやいた。

直君の家でおじさんに会った時、おじさんは直君に隠すように私にありがとうと言った。

私は今でも鮮明にその時のおじさんの表情を覚えている。

本当に、嬉しそうな、けれど今にも泣きそうなそんなくしゃくしゃな顔でのありがとう。

決して、大の大人が子供に見せる顔ではない。

おじさんは直君が周りの人達から酷い扱いを受けていることを知っている。

この田舎では直君が生きていくのには少しばかり辛いことが多すぎることも。

保健室登校や私と直君の関係、全部分かった上でそれでも逃げずに直君を支えている。

簡単に、他の地方に引越してしまえばそれで済むのかもしれない、けれど直君が見つけたあの保健室での小さな幸福を守るために間違はなく頑張ってくれている私達の味方。

私は素直なおじさんをかっこいいと思う。

素敵なお父さんを持って直君はとても幸せ者だ。

「待った？」不意に横合いから声がした。

振り向けばそこには直君がいた。

相変わらずフードを目深にかぶってけれどそれでも直君が今楽しそうに笑っているのが分かった。

大好きなお父さんと休日をごす嬉しさが隠しきれないで彼の周りに散らばっている。

「あれ？静穂？」直君は私がいることに気がついてびっくりしたように言った。

「偶然ってすごいかも」私は嬉しくて直君に飛びついた。

直君が素敵な人に囲まれていることが、その輪の中に私も一緒にいられることが嬉しくて仕方がなかった。

しばらくして、私のお母さんが映画館から出てきた。

「あら」お母さんはそうつぶやいて直君とおじさんを見る。

「あ、どうも、いつも息子が世話になっています」おじさんは丁寧に頭を下げて、私のお母さんも慌てた様にいえいえ、こちらこそと返した。

少しだけお母さんの顔は何故か引き攣っていた。

そうして、大人たちの世間話に耳を傾けながら私と直君はこそこそと小声で話をして、しばらくしてお互いに家に帰ることになった。私とお母さんは前から行こうと言っていたカフェによることになっていた。

直君とおじさんに手を振って私はお母さんと手をつないで映画館の前から離れていった。

直君とおじさんはちょうど反対の方角へと歩いて行く。

「あの子が静穂の言っていた、直君？」歩きながらぽつりとお母さんが言った。

「うん、そうだよ。ハンサムじゃないけどとっても頭がいいんだよ。それにやさしいし」私はそう言ってお母さんを見上げた。

そう言えばお母さんは直君と会ったことはなかったのかもしれない。おじさんとは町内会のなんやかやで会ったことはあるだろうけれど。

「そう。あの子が」なんだろう、そう呟いたお母さんの顔はどこか辛そうに歪んでいた。

終わりの始まり（後書き）

直と静穂の頭上にかすかな雲が陰り始めています。

大人たちの思いと彼ら子どもたちの思いがそれぞれ交差していきま
す。

次話をご期待ください。

幼すぎるロミオとジュリエット

その日の夜、私は昼間の興奮がなかなか冷めなくてベッドの中で何度も寝返りを打っていた。寝つけない。お父さんとお母さんはきつとりビングで晩酌をしているところだ。怒られるかもしれないけれど、私もリビングに行ってお茶でも飲ましてもらおうか。そんなことを考え、ベッドから出ると部屋から抜け出し、静かに階段を下りて行った。リビングの扉の前まで来ると中からお父さんとお母さんが話している声が聞こえてきた。

「そうか、それで静は保健室登校しているんだな」お父さんの声はいつもより低く響いていて少し、怖かった。

「ええ、まさかあの子がいつも話している男の子がああ川村さんところの息子さんだなんて」

「よくよく考えればすぐに分かったのかもしれないな。保健室登校している子なんてそう多くはないのだろうし、それにしても困ったものだ」お父さんの声が暗い廊下まで響く。何の話をしているのだろう。私は嫌な感覚が背筋を走るのを覚えた。直君が一体なんだというのだろう。私が保健室登校している理由が直君であることがそんなに問題なのだろうか。保健室登校ってそんなに悪いこと？

「ともかく、これ以上静を川村さんところの男の子と係わらせるわけにはいかんだろう」そう言ったお父さんの声はとても冷たく、暗く聞こえた。

「でも、あの子に何て言えばいいか。隼人君のこともあるし」お母さんは困ったように言った。隼人君は直君と同じアトピーを患っている親戚の子だ。私は少しずつ後ずさりするようにそこから離れると階段を上がり、ベッドにもぐりこんだ。どうして？どうして私が直君と仲良くしていたらいけないの？私は何も分かっていなかった。差別というものは広がっていくものだということも。ここがそういうことに容赦のない土地だということも。なにも分かってはいなか

った。

次の日の朝、朝食の席でお母さんがこんなことを言い出した。

「ねえ、静ちゃん。たまには保健室じゃなくて教室の方にも顔を出してみたら？」お母さんは私が昨日の夜、お母さん達の会話を聞いていたことを知らない。

「どうして？ どうしてそんなこと言うの」

私の過敏な反応にびっくりしたのか驚いたように口をつぐんでしまおうお母さん。私は悔しかった。今まで直君の話をしてもやさしく笑っていたお母さん、それが今は私と直君との仲を裂こうとしている。酷い裏切りだった。

結局、お母さんとは口を利かないまま家を出た。もう、両親は自分の味方ではない。あと、頼れる大人と言えば友恵先生だけだ。直君には相談できない。きつと直君はこの話を知れば私を避けるようになるだろう。私のためを思って、敢えて私から離れて行ってしまう。そんなの耐えられない。小学五年生のロミオとジュリエットなんて喜劇にもなりやしない。

昨日の夜、映画を見に行ったその日の夜だ。

父さんはリビングに僕を呼び、大事な話だと言って僕を自分の横に座らせた。

僕と静穂がロミオとジュリエットになってしまいかもしれないという話。

父さんが言うには、父さんは町内会では有名なのだそうだ。

アトピーを患った息子がいるということで。そしてその息子は差別を受けているということだ。

「こんな話、本来ならお前に面と向かって話すことじゃない。ましてやお前はまだ小学生。はっきり言ってお父さんは自分が正気かどうか疑うよ」そう言って自分の顔を両手でこする父さんは酷くやつれて見えた。

簡単にいえば、静穂の両親は差別を受けている僕と静穂が仲よくすることで差別の対象が静穂にまで向けられることを恐れるだろうということだった。

まず、間違いなく静穂は僕から引き離される。

今はまだ静穂自身は明確な差別は受けていない。

けれどいずれは確実にそうなるだろう。

そうなる前に、なんとかしなければいけない。

お前は どうしたい？ 父さんは そう言っ て僕を見た。

「決まってるよ。そんなの」僕は そう言っ て父さんの肩を拳で叩いた。

見くびっ てもらっ ては困る。僕は これでも父さんの息子だ。

「自分の彼女くらい守っ て見せるよ。僕が離れることで彼女を守れるなら やりとげ てみせるよ。まっ たく、こんなくさいセリフを言う機会があるなんて思わなかつ た。これじゃ、三流小説だね」

その時、僕は 自分では苦笑いをして いるつもりだつ た。

良くあるドラマのかっ っこいい主人公のように。

だから、自分の頬を伝う冷たいものを僕は 気にしないことにした。

そうでなければ、僕にただ無言で頭を下げる父さんにも申し訳がたなかつ たから。

その日、僕は 理解した。

静穂や静穂の家族、僕の父さんと母さんにも、もしかしたら山口先生にだっ て僕のこの重荷はのしかかるのだと。

僕の周りにいる人間は僕と係わつ たせいでいろいろな辛い思いをしなくてはいけ ないのだと したら、すべての責任は僕が被るべきなのだ。

ロミオとジュリエット、二人は悲劇的な運命によっ て二人とも死んでしまつ た。

ならば僕は誰と死ぬべきだろう？

僕はきつ とこの病氣と共に死なねばならないのだろう。

そう、思つ た。

幼すぎるロミオとジュリエット（後書き）

直は自分の心を抑える決意をします。

すべてが幸せだったときはあつという間に過ぎ去り、その中で一体何をすべきか。それぞれがそれぞれにあがいていきます。

次話をご期待ください

大人たちの想い

川村辰巳、川村直の父親は息子と話をした後、庭へ出て煙草を吸っていた。

小さな庭で空に浮かぶきれいな月を見上げて

「ちくしょう」そう、つぶやいた。

月が憎らしかった、夜空に瞬く星達が憎らしかった、世界が、自分が、全てが憎らしく思えた。

小学五年生だ、たった十一歳の子供にいったい自分達大人は何を背負わせようとしているのか。

辰巳は唇を噛む。自分の自慢の息子ははっきりと自分の愛する者を守ると宣言した。

十一歳の子供が誰かを守ると。本当ならあの子はもっと聞き分けがなくとも良いのだ。

どうして好きな子と離れなくてはいけないのかと駄々をこねて子供らしい反抗をしてくれて良かった。

むしろ辰巳は心のどこかでそれを期待していた。

直が子供らしく駄々をこね、子供らしく静穂と家出でもしてくれれば良かったのに。

自分の息子は精神的にかなり成長してしまっていた。

それは普通の環境で言えば喜ばしいことなのだろうが直の場合はそうではない。

歪んだ環境の中で、ああやって精神的に成長しなければ生きてはこられなかった息子。

きつとその成長は直のどこかを歪めてしまっている。

息子にそんな環境を押しつけたのはどこのどいつだ。

辰巳は自分の不甲斐無さが悔しかった。

歪んだ世界で息子がやっと手に入れた小さな幸せを守ってやれない自分が憎かった。

何が父親だ、自分にそんな大層なものを名乗る資格などないと思った。

それでも自分は直の父親だ、資格が無くてもそれは変えられない。本当に、どうすればよいのか分からなかった。

誰かに助けを求めたかった。

それはどうしてもできない願いだったがそれでも息子の笑顔が守られるのであれば自分の何を差し出してもよいと思った。

「あなた」ふいに後ろから声がかかる。

息子の様子を見に行っていた佳苗だった。彼女も母親としていろいろ思うことがあるのだろう。

「直は？」辰巳は夜空を見上げたまま聞いた。

「ベッドには入ったけれど、私がいると泣くこともできないみたいだったから」泣きそうな声で言う。

「そうか」

二人は並んで立ち、ただ空を見上げた。二人は涙がこぼれないように上を向くしかなかった。

自分達には泣くことも許されない、そう思ったから。

「どうしてこんなことになってしまったの」ぽつりとつぶやく佳苗は答えなど出ないことを知っているようだった。

「どうしてだろうな」

辰巳は息子の涙をこれから先、一生忘れられないだろうと思った。

「ふう」溜息をついて髪をかきあげる。

手の中で飲みかけのコーヒーが入ったマグカップをもてあそぶ。

山口友恵は保健室でぼーっとしていた。とっくに下校時刻は過ぎていてそとはもう薄暗かった。

今日、静穂が助けてほしいと友恵を頼ってきた。

ロミオとジュリエットを救ってほしいと。

けれど友恵は神父にはなれなかった。偽の毒薬を渡したところであの子達に逃げられる場所はどこにもない。

小学五年生が親元を離れて生きていけるほど世間は甘くなかった。結局自分は最後まであの子達を助けてやる事などできなかったのだ。あの子達が卒業するまでこの保健室を守る事でとがんばってきた自分は結局何もしていないのと同じだった。

「先生もがんばるから、あきらめちゃだめよ」そう声をかけた時の静穂の笑顔が思い出される。

心の底から安心しきった笑顔。あの子は本当に私なんか任せておけば大丈夫だと思っている。

情けなかった。自分はいつから優しさを言い訳にいろんな事から逃げるようになってしまったのか。

今日、直は学校に来なかった。おそらくこれから来ないだろう。直の対応は迅速だった。大人であるはずの自分よりも早く、静穂を救う方法を見つけ出し、実行に移していた。

このまま直が静穂に会わなければ、静穂は差別されることはない。たった十一歳の子供が自分の大切な人を守るためにその身を犠牲にして戦っている。

差別を許してしまっている大人達よりも、何もできなくてただおのれの無力さを嘆いている自分よりも、誰よりも彼は大人だった。きっと静穂は納得しない。

けれど直のとった行動が今、一番確実な方法だ。

それでも直の行動は間違っていると友恵は感じる。そんな解決方法を認めたくはなかった。

「生意気なのよ」友恵はつぶやいた。

子供なら子供らしく誰かが笑って幸せに解決できる、そんなハッピーエンドを望んで喚いていれば良いのだ。

誰がそんな割り切った考えをしると言った。絶対に認めるもんかと思った。

友恵は今、心の底から怒っていた。けれど一番その怒りをぶつけたのは結局、他の解決方法を思いつけないでいる自分に対してだった。

大人たちの想い（後書き）

大人たちの想い、子供たちはこれから・・・
次話をご期待ください

足掻き

「無理を言っているのは分かっています。けれど、どうか」辰巳はそう言って頭を下げた。

辰巳の前には困った顔をした相川夫妻がいた。

相川大輔、さつき、二人は静穂の両親だ。

ある日突然訪ねてきた川村直の父親は頭を下げて静穂と直の仲を裂かないでほしいと言い出したのだ。

お互いに一児の親である以上、お互いの考えなど分り切っているというのにそれでもと頭を下げる辰巳。

あれ以来、直と静穂は会っていない。

直が一方的に静穂を避けることで成り立っている事だった。

「あの子は、直は、自分の愛する者を守ってみせると言っていてあれから学校にも行っていません。静穂ちゃんが訪ねてきても顔もみせません。けれどあの子は人には見せませんが泣いているんです。手前勝手なのは分かっていますが、それでも私は耐えられない。たった十一歳の子供が背負うにはあまりにも重すぎる」

辰巳は通された和室の畳に頭を擦りつけて頼み込む。

静穂と直の仲を認めてやってほしいと。

あと一年、小学校を卒業すれば周りの環境はまた違ってくる。

直はもうすでに少し離れた私立の中学に進学するつもりでいる。

静穂が同じ学校に進学するかどうかは分らないがそれでも子供達の活動の場は今とは違ってこの地域から他の場所に変わる。そうなればもう、この土地の差別におびえる必要はなくなるかもしれない。

辰巳は直の中学進学を期に引越しも考えていた。

直の通学にいいように進学先の土地に引越すつもりだ。

そこは今いる土地よりは栄えていて差別もそこまでは酷くないはずだ。

結局のところあと一年、その一年の間に静穂に差別の目が向くのか

向かないのか、そこが問題だった。

「一年は結構長いですよ。川村さん」そう言ったのは静穂の父、大輔だ。

「一年間、お宅の息子さんを信用して静穂を任せてそれでもし静穂まで差別の対象にされたらそこから先、静穂はどうやって生きていけばいいんですか？直君は一年でここを離れるのかもしれない。けれど残された静穂は？」

あんまりな言い様に妻であるさつきが大輔を止めようとするが今さらだと言って大輔は聞く耳持たない。

結局のところ、大輔とさつきにとっては静穂のことが一番優先させることであり、辰巳の方にしたって直のことだけを考えての行動である以上お互いが納得するなどありえなかった。

「正直に言えば、こんな自分が不甲斐無いとは思いますがね」そう言って溜息を吐く大輔の眉間には深い皺が寄せられていた。

「まさか娘の初恋がこんなにも辛いものになるうとは」

辰巳は大人しく引き下がるしかなかった。

娘のいない彼には大輔の気持ちはわからないが、それでも大輔が直のことを少しは認めてくれているのは理解できた。

他の大人たちのように差別して、というわけではないと。

それでも周りの環境が許さない。

結局のところ、双方共に息子、娘を守るのに精いっぱい相手になでそれが及ばないだけなのだと思ひ知らされた。

普通の田舎よりも特殊なこの土地の環境がただ、憎らしかった。

お互いに不幸だったとしか言いようがなかった。

足掻き（後書き）

長いブランクがあいてしまいましたが続きます。
次話にご期待ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916i/>

肌に触れて

2010年10月21日22時12分発行